

元末の海運と劉仁本

——元朝滅亡前夜の江浙沿海事情——

はじめに

元朝が大都（北京）の膨大な人口を養うために、江南の糧米を華北まで海運輸送していたことはよく知られている^①。当初、大運河を開鑿して河運に頼った元朝だが、至元十九年（一二八二）に海賊朱清・張瑄に海運を命じ、意外の成果に氣をよくした結果であった。特に大徳七年（一三〇三）に朱・張が除かれ、国家主導の海運体制が整備されると、海運量は飛躍的に増大した。春・夏二回、つごう一千艘以上の官船が太倉（江蘇）の劉家港から直沽（天津）に至り、あとは陸路が利用された。最盛期の海運糧は毎年平均して三百万石に近く、天曆二年（一三二九）には最高額の三百五十二万余石が記録されている^②。

だが元朝も後半になると、海運体制そのものに破綻が生じてくる。海運に従事する船戸の貧窮化や担当官吏の汚職、さらには海難事故の多発等が原因であった^③。それでも元朝最後の皇帝順帝（在位一三二三—一三六八）の初年には、依然として三百万石近くが海運されており、制度の矛盾が元末になって一気に噴き出したわけではない。むしろ崩壊の契機は外部に求められ、元末の反乱に起因する国内の混乱

檀 上 寛

が、海運の継続を困難にさせたことによる。

具体的には、海賊方国珍が海道を遮断し、群雄の張士誠が穀倉地帯を占拠したことで、糧米の確保と輸送とが不可能になったことだ。この事態に直面して元朝が採用したのは、当の彼らを利用して事態の打開を図ることであった。張士誠に糧米を、方国珍に海船を供出させて、彼らに海運を再開させたのである。国初と同じく海賊頼みの海運が実施されたわけだが、異なるのはまさに腫れ物にさわるように彼らを処遇していることだ。弱体化した元朝には、もはや彼らこそ最後の頼みの綱だったのだろう。

方・張の共同海運は元朝の再建に効果のなかったこともあってか、特に重視されることはないようだ。まして現地で海運を推進した劉仁本という人物に至っては、その名を知る人も多くはなからう。そんな人物をことさらに取り上げるのには、もちろん理由がある。現地スタッフならではの彼の貴重な記録をもとに、江浙という地方社会の中で海運を捉え直すことができるからだ。現地の人々にとり、元末の海運はどのような相貌を呈していたのか。元・明交替期の地方事情を知る上でも興味深い。本稿ではまず共同海運に至るまでの江浙事情を概観

し、次いで劉仁本という一地方人士の目を通して、元末の国家プロジェクト——海運再開事業を素描してみたい。

一 元代海運体制の崩壊と方国珍

至正八年（一三四八）十一月、元末の反乱の先陣を切って、台州路黄巖州（浙江省）の官塩販売人である方国珍が海上で蜂起した。その発端は官塩の販売権をめぐる主導権争いにあったとされるが、殺人を犯して海上に逃亡した彼は、瞬く間に附近にも勢力を拡大し、反元朝の姿勢を鮮明にする。この間、台州や温州の浙江沿岸部で略奪行為を働く一方、元朝の海運船への襲撃も繰り返し、至正十年頃には千余艘の船団を持つ巨大な海上勢力へと成長した。^⑤

元朝の海運が中断した原因として、方国珍水軍による海上輸送路の妨害がしばしば指摘される。なるほどそれは間違いではないが、しかし問題はそれほど単純ではない。より直接的には、至正十二年に方国珍が水軍を率いて北上し、海運の根拠地である太倉を襲撃したことだ。『弘治太倉州志』巻九、雑誌には次のようにある。

至正十二年三月十三日、方国珍は海島の貧民の船千余艘を率いて太倉を侵略した。劉家港に突入すると、海運用の官船に火をつけ無数に焼いた。十五日、一路太倉に向かうと、大いに略奪の限りを尽くした。浙省参政宝哥と樊執敬が兵数千人を引き連れて来援し、崑山に駐屯した。彼らが平江の游奕十字軍を前鋒として遣わしたところ、張涇橋に至ったところで賊に遭い、潰滅してしまつた。賊の勢いはますます猖獗をきわめ、張涇から武陵橋に至るまで、横たわった死体が道を塞ぎ、略奪された財貨は数え切れない

ほどであった。

太倉に集積されたその年の漕糧をねらつてのもので、この襲撃により劉家港に停泊していた海船は大半が破壊され、糧米はあらかた奪われた。結局この年は海運を実施できないまま終わってしまうが、翌十三年の海運が河船を代用していることから、いかにこの時の打撃が大きかったかが窺えよう。^⑦

至正十三年正月、元朝の招撫策で方国珍は一旦降服、十月には治中の職を授けようとしたが、彼は受けなかった。^⑧ そのため元朝は同月、太倉の劉家港に分鎮水軍万户府を設置し、防備体制を強化した。案の定、方国珍は翌至正十四年二月に、再び漕糧をねらって太倉を襲撃する。『宣統太倉州志』巻十四、兵防中はいう。

〔至正〕十三年十月、劉家港に分鎮水軍万户府を設置し、宣尉使の納蘭哈達を正万户に、宣尉副使の董搏霄を副万户に任命した。明年（十四年）二月、方国珍は再び「舟山群島の」蘭秀山の賊を率いて来襲した。搏霄がこれを劉家港で破り、さらに半涇で打ち破ったので、賊は夜半に逃れ去った。

今回は元朝の防御策が実って撃退されたものの、太倉の受けた被害は大きく、先の史料の続きに「是より遂に建白して海運を停む」とある。海運がこれを機に完全に途絶したわけではないが、ほとんど麻痺状態になったことは間違いない。

方国珍の反乱から三年後の至正十一年、いわゆる「紅巾の乱」が勃発した。各地に呼応する者が相次いだ、太倉にほど近い泰州（江蘇）でも官塩仲買人の張士誠が蜂起した。^⑨ 彼は至正十三年五月に高郵を落とすと、誠王を名乗り周囲の樹立を宣言する。元朝は公称百万の

軍隊を派遣するが鎮圧に失敗、十六年二月には穀倉地帯の平江（蘇州）も奪われてしまう。張士誠は引き続き周辺の湖州・松江・常州等を攻略し、長江デルタに強大な独立政権を樹立した。元朝は海運の起点である太倉はもちろん、最大の生産地帯である長江デルタを喪失し、まさに瀕死の事態に立ち至った。

同じ至正十六年の三月、元朝の江南支配の拠点である集慶（南京）が、東系紅巾軍の一部将朱元璋（後の明の太祖）に落とされた。彼は当地に地方政権を樹立すると、隣接する張士誠と小競り合いを続けながら、浙東への進出の気配を見せていた。かたや長江中流域の湖北から四川にかけては、西系紅巾軍の徐寿輝一党が勢力を張り、長江の制海権は反乱軍に牛耳られつつあった。長江以南の多くの地域が反乱軍の手中に落ち、元朝は海運の不通ばかりか、運糧米の徴収すらままならぬ状況に陥ってしまった。

こうした江南地方の混乱は、大都の食糧事情を急速に悪化させずにはおかない。『草木子』巻三上、克謹篇には次のようにある。

元の大都の軍民の食糧は、久しく海運に依存していた。ところが、蘇州を失うと江浙の海運が通じなくなり、湖広を失うと江西からの海運が通じなくなった。大都は飢饉となって、人々は相食み、遂に統制できなくなった。加えて中原は連年のように旱魃とイナゴの災害があり、野には生き残ったものがなく、人は食うものもなく、イナゴを捕らえて食糧とするありさまであった。

すでに元朝の無策により、至正の初め頃から全国的に饑民・流民が輩出していたが、海運の不通は致命的であつたらしい。いささか誇張はあるものの、大都の餓死者は百万人を数え、都の十一の門外に万人

坑という穴を掘り、死体を埋めたとの記録もある。^⑨

海運不通の元凶であつた方国珍が、元に降つて海運の総責任者となつたのは、まさにこんな社会混乱の昂じた至正十六年三月のことであつた。すでにこれ以前、巨大な海上勢力を築いた彼は、至正十四年九月に台州（浙江省）を奪うと、翌十五年春に慶元（寧波）を無血占領、同年七月には温州を攻略して、慶元・温州のいわゆる「浙東三郡」を手中に収めつつあつた。彼が元朝に降伏したのは、近隣で台頭してきた張士誠と朱元璋に対抗するためで、このとき彼は「海道運糧漕運万戸兼防禦海道運糧万戸」に任じられ、兄弟たちも相應の官位を受けた。元朝からすれば、方国珍の水軍で海道を防備し、その海船によって江浙の糧米を大都に運ぶ体制ができたのである。^⑩

至正十八年五月、方国珍は新たに「江浙行省左丞兼海道運糧万戸、衢国公」を元朝から授かった。このことは元朝が方国珍の浙東支配を認知し、彼にその統治を任せたことを意味する。事実、彼は慶元で幕府を開くと、当地の官僚・知識人を傘下に集めて一層の勢力扶植に努めていく。台州には兄の方国璋と弟の方国瑛、温州には甥の方明善等が派遣され、彼らを通じた間接支配の形態がとられた。さらに至正十九年十月には江浙行省平章政事に任じられ、朱元璋に降服する至正二十七年十二月まで、一貫して江浙行省の分省（浙東三郡）長官として浙東の経営に当たつた。

方国珍の浙東支配のあり方については、彼が完全に掌握できたのは慶元だけとの指摘もあり、^⑪そうした政権の脆弱性が元朝に傾斜させた一つの理由ではある。彼は群雄中ではめずらしく王を僭称しなかつたように、必ずしも独立的な志向性を持っていなかった。体制内での

勢力護持につとめる他者依存的な姿勢に終始し、水軍で天下統一を図るべきだとの意見にも一切耳を貸さなかった。こんな彼の個性も、元朝との協力に向かわせる一因であつたらう。ただこの点については外部的要因もあり、隣接する朱元璋軍団の脅威に、たえずさらされていたことも無視できない。

他方、張士誠は強い独立志向を持ちながらも、朱元璋の存在が大きな障害となっていた。至正十七年七月、常熟での朱軍との戦いに敗れて弟張士徳を失った彼は、元朝との提携に活路を求めることになる。翌八月、張士誠は杭州にいる江浙行省左丞相達世帖穆爾（達識帖睦遷）の取りなしで、元朝から太尉の官を授けられた。今まで僭称していた大周という国号も捨て去り、元朝の臣下となつたのである。方国珍と同様、領土はそのまま保持したが、完全制圧できない元朝が、委任統治という形で体面を取り繕った結果であつた。だが彼の降服が江浙沿岸部のパワーバランスに、決定的な影響を与えたことは事実である。朱元璋を共通の敵に、元朝・方国珍・張士誠による三者間協定の成立する下地が生まれたからだ。

至正二十年五月、元朝主導のもとに方国珍と張士誠との共同海運が開始された。だが元朝の期待とは裏腹に、実際の成果はそれほど上がることはなかった。海上輸送という技術上の問題もさることながら、もともと敵対する方国珍と張士誠が、元朝の臣下ということだけで協力関係に立たされたことによる。そんな不安定な海運事業が曲がりなりにも継続できたのは、毎年中央から派遣される勅使の督促に加え、海運を裏で支える現地スタッフがいたからである。とりわけ方国珍幕下のブレンたちの存在は大きく、彼らの協力なくして海運の再開は

あり得なかつた。彼らは身命を賭してこのプロジェクトの推進に没頭したが、その代表格が劉仁本という人物であつた。

すでに方国珍が慶元に幕府を開いた至正十八年前後から、当地の官僚・知識人の中には方国珍に協力する者が現れ出す。名前の分かつている者だけでも劉仁本をはじめ、郭仁本、張本仁、鄭永思、丘楠、劉庸、詹鼎らがいる。特に劉仁本は方国珍と同郷の黄巖州の出身で（一説では天台県ともいう）、科挙合格後に温州路総管を歴任するなど、経験と実績に富む実務官僚であつた。彼は慶元の士人社会では名士的存在でもあり、のちに竜泉山（浙江省余姚）の山麓で王羲之の蘭亭にならって雲詠亭を結び、浙東の名士四十二人を招いて詩会を催したことも知られる。声望あり実務に長けた多能の人材で、至正十九年、江浙行省左司郎中の身分で方国珍政権に参加した。

慶元は方国珍に無血占領されたこともあって、当地の官僚・知識人と方国珍との関係は、わりと良好であつたらしい。はたして元朝の慶元路統治システムがそのまま方国珍政権に継承されたか否かは措き、確かに親元路線の敷かれる下地は十分にあつた。特に方国珍が元朝に降つて官位を受けたことは、劉仁本をはじめ親元派の人々にとり、方国珍への抵抗感を和らげたはずである。彼らは進んで慶元幕府に加わることで、方国珍の援助を引き出そうとしたのではないか。劉仁本の文集『羽庭集』にコメントした『四庫全書総目提要』は、次のようにいう。

時に方国珍は温・台諸郡を占拠すると、士大夫を招聘したので、仁本は幕中に入り謀議にあずかつた。国珍は毎年海船を準備して、江淮の糧米を大都に輸送したが、実は仁本がその事業を担当

していたのである。彼の職は郎官であり、元朝が授けたものであった。それゆえ文集中の諸作は、おおむね元朝の衰退に感慨を抱き、王室を懐かしむ内容である。彼が国珍に従ったのは、その力を借りて元朝を復興させようと考えたからであった。ちょうど羅隠が呉越に仕えながら、実は心の中では唐のことを忘れていなかったように。

なるほど、ここでは劉仁本のことしか述べられていないが、先に見たように劉仁本は当地の名士として多くの人脉と繋がっていた。残念ながら、史料上から現地スタッフの具体的動きは見出し難いが、彼らの地道な努力のあったことは間違いない。次章では劉仁本の文集『羽庭集』（『四庫全書』本）と『金声玉振集』所収の二つの文章「江浙行省興復海道漕記」「送中書兵部尚書伯元臣回京叙」（以下、A・Bと略称）をもとに、海運事業の顛末をたどってみたい。

二 方国珍と張士誠の共同海運

『元史』をはじめ多くの史料は、最初の方・張への海運要請を至正十九年だとする。だがBによれば、正確には至正十九年が最初ではなかったらしい。

至正十六年、淮夷（実は張士誠）の兵難が起こると全呉に蔓延した。海道は塞がれ、漕運も中断した。朝廷はそれでも情けを掛けて罪を赦したので、乱れて不正常となった常典・行事もすべて旧に復した。そこで江浙平章方公（方国珍）に命じて海道のを治めさせ、浙東に分省を設けて、水軍を統括して漕運を通じさせることにした。太尉張公（張士誠）にも平江から糧米を輸送するよ

うに命じ、賦税を供出させようとした。ところが派遣された使者は、あるいは老齢すぎて職に適さなかったり、甚だしきに至っては天子の名を汚して帰京し、いたずらに処罰されるだけであった。風潮の災難に遭遇して、山東の沿海で溺れる者もいた。

至正十九年以前に派遣された使者は、すべて海運再開に失敗したという。Aも「往年、江南に使いして漕運を督促する者は、おおむねその任に堪えず、天子の命に叶うことはなかった」と述べ、張士誠が元朝に下って以来、幾度となく使者の派遣されたことを示唆している。一向にらちのあかない状況に業を煮やした元朝当局は、本腰を入れて新たな人選を行った。Bの続きはいう。

〔至正〕十九年九月、皇帝は特に六部の長官の中でも優れた者を選び、兵部尚書伯顔帖木児には東浙に使いして、船を進めて糧米を転運するようにさせた。また戸部尚書曹履亨には平江に使いして、糧米を集めて船に載せるようにさせた。

伯顔帖木児と曹履亨の二人は、中央の期待を一身に担って派遣されてきたのである。

しかし、彼らが現地に到着してみると、問題はかなり深刻であった。海運再開のめどが立たないのは、元朝の使者の無能というよりは、張士誠と方国珍に問題があったからだ。「彼らがやって来ると、たまたま边境の守備（方国珍と張士誠）が仲違いしており、事業はほとんど緒に着いていない状態であった（B）」¹。張士誠と方国珍は互いに対立し、海運どころの話ではなかった。直前まで互いに争っていた以上それも当然で、伯顔帖木児等はずば彼らの不安を取り除く必要があった。この間の経緯を『平呉録』（『紀録集編』卷二十九）によ

窓 って、簡単に見ておこう。

そこで「元朝は至正十九年」九月に尚書の伯顔帖木児等を派遣し、士誠に御酒と龍衣を与えて、海運のための糧米を徴収しようとした。伯顔等は杭州に到着すると天子の詔を伝え、方国珍には船を用意して運搬するように命じ、「杭州の江浙行省丞相」達識帖睦爾がその事業を統括した。しばらくすると、士誠は国珍が糧米を載せても京師に行かないのではないかと心配し、国珍も士誠が自分の船を押さえ、すきを見て襲撃するのではないかと恐れた。互いに疑心暗鬼となっていたのである。伯顔が彼らのあいだを往来して説得したので、やっと十一万石の糧米を都に送ることができた。これ以後、毎年海運することが常例となった。

互いの不信感を解消するため、伯顔帖木児が平江と慶元とを往来し、説得に当たったことが窺える。戸部尚書の曹履亨も同様で、彼は現地に着後、母親の訃報に接するが、中央の命令により喪に服することもなく職務に専念した。当時、劉仁本も「奔走の列」にあったというから、彼らとともに事態の打開に向けて奔走していたのだろう。

彼らが特に頭を痛めたのは、張士誠の糧米をどのようにして方国珍に引き渡すかということであった。本来、平江に集積された糧米は、太倉から海運するのが最も便利である。だが太倉は張士誠の支配下にあり、方国珍が受け入れようはずもない。方・張双方ともに許容できる地点で、糧米の授受を行うしかない。海運のルートはどこに決定するかに、今次の事業の成否が係っていた。平江・慶元両方の意見を聞きながら、必死の調停工作が続けられた。Aはその経緯を次のようにいう。

兵部（伯顔帖木児）は越（慶元）に行き、戸部（曹履亨）は呉（平江）に行き、ともに丞相府で落ち合って相談することとし、丞相がまとめ役となった。二人の使者は散々苦勞して、方国珍と張士誠が服従するか背くかを検討し、地の利と人の和を推し量った。最初は崑山の劉家港で集合することを議論したが、中途で浙江の石墩に変え、最終的には嘉興の澈浦で折り合った。

澈浦のある嘉興路は張士誠の支配下とはいえ、方国珍の拠点である慶元からさほど遠くない。しかも杭州湾最奥部の杭州と違い、外海に近い方国珍にとって危険性も少ない。さらにこの地には元初に海外貿易を司る市舶司が置かれ、その後も商船の寄港地として利用されていた。海運の起点として、まずはうってつけの港といえた。

こうして翌至正二十年五月、いよいよ方国珍と張士誠との共同海運が開始された。海運再開の重任を担っていた伯顔帖木児等にしてみれば、最後の最後まで気が気でなかったらしい。Bの続きは次のようにいう。

「伯顔帖木児は」自ら海船千百艘を率いて、嘉興の澈浦で待っていた。一方、平江の糧米もまた各地に寄りながら、杭州の石墩に至った。石墩は澈浦を去ることわずか一日の行程だが、海は浅く泥沙でぬかるんでいるため、船は膠着して進むことができない。

そこで伯顔公は歩いて石墩まで往来し、かかとや肘が泥沙に取られて再々溺れそうになった。しかし最終的には澈浦で授受する方が便利だと決定し、糧米十一万石ばかりを手に入れたのである。水夫と岸卒は歓呼して次々と受け渡し、旬日の間に海運事業を達成した。艱難を平易に改め、陰阻を簡夷（平らかな土地）に変えた

のは、公の勤勞と敏捷さのたまもので、人々はみなこれを困難なことだと言い合った。

激浦を出た海船は、このち約二十日間ほどで直沽に到着した。その知らせを受けて、「浙の父老たちが、手を額に当てて頼んで言うには、この事業はいったん中断して復興したのである。今日再びこのような東南の盛典を見ようとは思ひもなかった。どうかこの事を記録しておいていただきたい（A）」それに応えて劉仁本がしたためたのがAの「江浙行省興復海道漕記」に他ならない。敵対する呉の張士誠と越の方国珍がそれぞれの思惑を抱きながら、共同して実現したのがこの度の海運であった。それはまさに元末の「呉越同舟」と呼ぶにふさわしい情景であつたに違いない。

ともあれ、多くの期待を担つて至正二十年五月に海運は再開されたわけだが、糧米の総額は十一万石というように、盛時の三百万石に比べると微々たるものであつた。確かに種々の困難を乗り越え実現された以上、初回としてはやむを得ない面もあつたろう。劉仁本も、

昔、海運が初めて興るや、八・九万石から始めたが、しだいに増加して数百万石に至つた。どうして盛んにならないことがあるのか。盛んになれば衰え、衰えれば回復するものだ。今またその数は十一万石から始まつたが、たまたま昔の数に符合している。後日、巨万石の海運に變通するのも、実にここに始まるのである。どうしてそうならない道理があるのか。（A）

と述べ、将来への期待を表明している。この文章が書かれたのは海運実施直後の至正二十年閏五月のことだから、当時としては希望的観測も持てたのだろう。

だが、事實は劉仁本の思い通りにはいかなかった。方・張の共同海運事業は、至正二十年を皮切りに二十三年までつごう四回実施されたが、海運糧はそれぞれ十一万石、十一万石、十三万石、十三万石とはほとんど増加していない^⑨。しかも毎年秋には中央から高官を現地に派遣し、翌年の海運を督促せねばならなかった。方国珍と張士誠との利害を調停しつつ海運を実施するには、中央高官の強力なリーダーシップが必要であつた。

ことに張士誠は至正十七年に杭州を占拠して以来、当地での勢力を日ごとに増していた。彼は江浙丞相の達世帖穆爾に迫つて中央に王爵を要求させるなど、しだいに専横な振る舞いが目立ち始める。達世帖穆爾はその度に朝廷に取り次いだというが、海運統括者の達世帖穆爾がこのていたらくでは、元朝中央の期待がかなえられるはずもない。達世帖穆爾はその後、至正二十四年に張士誠の弟張士信によつて嘉興に幽閉され、やがて毒を仰いで自殺する^⑩。

かたや方国珍は元朝のために海運に従事する一方、朱元璋とも氣脈を通じていた。すでに至正十八年には一旦朱元璋に降服し、黄金五十斤を含む貢物を差し出している。元の勅使を受け入れた十九年には、朱元璋の矛先をかわすために、支配下の慶元・温州・台州三郡の献上と、息子の方関を人質として提供することすら申し出ている。元朝と朱元璋とを両天秤に掛けていたわけで、逆にいえば何時でも元朝から離反する可能性を持っていたということだ。

こんな二人が始めた海運である以上、当初から分裂含みであつたことは否めない。前後四回の海運のうち、その顛末が知られるのは先述の第一回目と、至正二十二年の第三回目である。ともに劉仁本の記録

窓
があり、すでに後者の頃になると方・張の態度はかなり消極的になつていたようだ。海運開始時には将来への期待を口にしていた劉仁本も、二十二年段階での文章を見ると、初回の海運についても「ただ

「盛時の」三十分の一を取って、十一万石を輸送しただけであった。海運の端緒を示してはいるが、とても十分なものではなかった」と記し、トーンダウンした評価を下している。一向に軌道に乗らない海運に対し、落胆してのことだが、その責任の大半は張士誠にあると劉仁本は考えていた。

実は第三回目の至正二十二年には、元朝当局は糧米を百万石に拡大するつもりであった。わずか十万石前後の糧米では、大都の食糧をまかなうことができなかったからである。例によって前年の二十一年秋に、中央から二人の高官が派遣されたが、この重責を担って到来したのは兵部尚書の徹徹不花^{チエチエフカ}と戸部侍郎の韓祺であった。『羽庭集』巻五、「送戸部尚書徹公通理趣漕回京序」には次のようにある。

〔至正〕二十一年秋九月、聖旨が下され、米百万石を平江に割り当てることになり、戸部尚書徹公がその命を受けた。公は科挙で身を起し、光明かつ才知に優れること一等ぬきんでおり、まさに命に恥じない人物である。平江に到着するや、ただちに天子の命令と下賜品を与えたところ、太尉（張士誠）は戦費の増大を理由に、命令通りの糧米が用意できないと言いつつ諷した。公は顔色を変えて抗議した。その議論は相手におもねることなく、決してくじけず、必ず満額を取り立てようと終始憤激してやまなかった。太尉は恐れはばかり、口をつぐんで返す言葉がなかった。そこで太尉は丞相に情で訴え、いろいろと融通を図ってもらい、よ

うやく尚書に謝罪することができた。ただこれは、丞相が一生懸命に根回しをし、徹公に懇願した結果であった。丞相は徹公に要求して当面は昨年の数量を輸送し、後に時期を見て不足分を送って償いたいと申し出たのである。こうして徹公は糧米三十（十三の誤り）万石ばかりを海船に積み込んで出発した。

百万石を要求する徹徹不花に対し、達世帖穆爾自身が懇請して前年度の額ですませたという。不足分は後に輸送すると決められたものの、むろん実現することはなかった。

このとき方国珍のもとに來たもう一人の勅使戸部侍郎韓祺は、失望と怒りの入り交じった複雑な心境のまま帰京している。『羽庭集』巻五、「送戸部侍郎韓君汝舟督漕運還京序」はいう。

至正二十一年秋九月、朝廷は戸部侍郎韓祺（祺）に命じて官船を鄭（慶元）より「敢浦に」赴かせ、そこから転漕させようとした。また別に官（徹徹不花）に命じて吳中で糧米百万石を用意させ、明年春に京師に到着するように取り決めた。……韓君は海船を決められた数のおり調達し、帆柱を連ね糧を漕いで進み、誰も手を抜くものはいなかった。ところが呉に到着してみると、糧米はわずかに十三万石ばかりが集められただけであった。君はこれを見て言った。「ああ、船隊が命令通りにならないければ、それは自分の過ちであろうが、かの地の糧米がそろわないのは、自分の罪ではない。自分は自分の力を尽くして、船を率いて事を成し遂げ、ただ謹んで糧米を差し出すだけである」。こうして船に乗ると速やかに進み、丁重に別れを告げて去っていった。

戸部侍郎韓祺の憤懣は、そのまま劉仁本のそれであったらう。この

序は韓祺に懲慙されて書いたものだが、そこには先の徹徹不花への序と同様、張士誠への不満の気持ちが見て取れる。すでに劉仁本には共同海運の終焉が予感されていたのかも知れない。

実際、翌至正二十三年五月に第四回目の海運が実施されると、張士誠はそれを最後に糧米の供出を完全に拒絶する。

〔至正二十三年〕九月、また戸部侍郎博羅帖木兒・監丞賽因不花を遣わし、海運を求めた。ところが士誠はいろいろと言いつねを以て、命令を拒んだ。このため東南の糧米を京師に輸送することは、この年を最後に中止されたという（『元史』巻九七、食貨五、海運）。

何度も王爵を要求して無視された張士誠は、至正二十三年九月に「吳王」を僭称し、元朝からの独立を一方的に宣言した。海運要請のために勅使が来た同月のことである。この時点で張士誠は完全に元朝を見限ったわけだが、部下の中にはその軽率な行動をたしなめる者もいたらしい。『平呉録』はいう。

当初、士誠が元朝に臣服したのは、実は士誠の参軍俞思齊が勧めたものであった。しばらくすると、士誠は自分にへつらう臣下の甘言を聞き、年貢を海運しなくなった。ひとり思齊が語っているには、「かつて賊であった頃には、年貢を納めなくともよかったでしょうが、今や臣下となった以上、それで済まされまじょうか」と。士誠は怒って机を地面にひっくり返した。思齊はもはやどうすることもできないことを悟り、官を棄て病と称して会稽に隠棲した。

彼もまた劉仁本と同様、元朝に忠誠を誓った知識人の一人だったのだ

ろう。

結局、方・張の共同海運事業が中断して以後、海運を一手に引き受けたのは福建の群雄陳友定であった。彼は群雄の中ではほとんど唯一の元朝の信奉者であり、方・張の共同海運とはほぼ同じ時期、独自に糧米を海運しては大都の危機を救っていた。だが福建という遠距離の地にいたため輸送が困難で、せいぜい漕糧の三・四割が大都に到着すればよい方であった。至正二十三年以後も海運は行われたようだが、どれほど元朝に対して貢献できたか定かではない。方・張の共同海運の中断とともに、元朝の海運は基本的に終焉を迎えたと見てよからう。それは同時に百年近く続いた元朝の命脈が、なかば尽きたことをも意味していたのである。

おわりに

方・張の共同海運が中断して四年後の呉元年（一三六七）九月、朱元璋の武將である大將軍徐達らが平江を落とし、張士誠の呉国を滅亡させた。捕らえられた張士誠は南京に護送され、当地で首をくくって果てた。同じ年の十一月、征南將軍湯和が慶元を奪うと、方国珍は部下とともに海上に逃亡した。湯和は水軍を率いて舟山群島の盤嶼で方軍を撃破、観念した方国珍は十二月になってようやく降服した。方国珍は罪を赦され洪武七年（一三七四）まで南京で生き長らえた。

洪武元年（一三六八）正月、朱元璋は皇帝に即位し、南京で明王朝が誕生した。同じ時期、湯和の水軍は南下を続け、福建の陳友定を鎮圧、頑なに降服を拒絶する陳友定を南京で斬った。勢いに乗った湯和は副將の廖永忠をさらに南下させ、広東に拠る群雄の何真を投降させ

窓
たため、沿海部の反明勢力はようやく消滅した。同年十月には大都の元朝も北に追われ、ここにはば中国全土が明朝の領土に帰することになる。

しかし、明朝成立後も方国珍・張士誠の殘党は反明活動を展開し、江浙沿岸部に計り知れない被害を与え続けた。『吾学編』四夷考、上巻、日本の条には次のようにある。

当初、方国珍は溫・台・処州を、張士誠は寧波・紹興・杭州・嘉興・蘇州・松江・通州・泰州諸郡を占拠し、ともに海上にいた。方・張が降服したり滅亡すると、諸賊の中の強豪な者はことごとく航海して、倭寇を糾合して入寇した。そのため洪武中には、倭寇がしばしば海上を略奪したので、高皇帝（洪武帝）は使いを遣わし將軍に命じて、城塞を築き兵隊を増やした。

方・張の殘存勢力は首領の降服後も、倭寇と結託して独自の海上活動を展開していたのである。^④ 明初に海禁が実施されたのは彼らの活動を封じ込めるためで、それだけ海上勢力の被害が無視できなかったことを物語る。^⑤ 明朝はその後、海上勢力の掃討戦を展開する一方、彼らの内地移住と衛所への編成を強行する。この点については海上勢力の実態ともども、稿を改めて検討してみたい。

ちなみに、劉仁本は方国珍の降服直前、温州で明軍の捕虜となり南京に送られた。朱元璋は劉仁本が海運の中心人物であったことを知ると、報復として鞭打ちの刑に処したため、背中が爛れて絶命したという。劉仁本は最後まで元朝に忠誠を尽くし、臣節を全うしたということだろう。それはそれで方・張の殘党とはまた別の、自己の信念に基づく身の処し方ではあった。清代の学者戚学標は「劉仁本を論ず」

（『鶴阜文鈔』巻上）という文章をしたため、彼を次のように評している。

慶元・温州・台州の数百万の生靈のうち、すべてが方国珍の虐政に苦しんだわけではない。劉仁本がひそかにその災いを除き、方国珍を自然に感化させたからである。余は悲しむ。仁本の志が明確にされず、その功績も顕彰されず、世々代々「偽臣」と同類視して、誰もが彼のことを誹謗していることを。ああ、明朝が興る時、謀議に従って元朝を北伐した者には、元朝の進士や故官が少なくなかったはずだ。これまた仁本にとり、必ずしも潔しとするところではなかったのである。

『明太祖実録』は劉仁本らの慶元スタッフを、「すべて州県の胥吏上がり」^⑥と酷評する。だが、劉仁本は胥吏でもなければ、方国珍の部下でもない。彼の意識下では徹頭徹尾、元朝の臣下であった。だからこそ方国珍のように、なんの抵抗もなく朱元璋に降服することには躊躇いがあったのだろう。

——仁本終始元人にして、未だ嘗て一日として明に入らず。

これは『四庫全書繪目提要』に記された劉仁本に対する評語である。彼の死は、明の成立に先立つこと一月のことであった。

註

- ① 元代の海運については、日本では藤野彪「朱清・張瑄について」『愛媛大学歴史学紀要』第三号、一九五五年、星斌夫「元代海運運営の実態」『歴史の研究』第七号、一九五九年、中国では高榮盛「元代海運試析」『元史及北方民族史研究集刊』第七期、一九八三年などが詳しい。
- ② 『元史』巻九三、食貨一、海運。
- ③ 『元史』巻九七、食貨五、海運。

水旱相仍、公私俱困。疲三省之力、以充歲運之恒數、而押運監臨之官、与夫司出入之吏、恣為貪黷、脚價不以時給、收支不得其平。船戶貧乏、耗損益甚。兼以風濤不測、盜賊出沒、剽劫覆亡之患、自仍改至元之後、有不可勝言者矣。

- ④ 寺地 遵「方国珍政權の性格―宋元期台州黃巖県事情素描、第三編―」『史学研究』第二二三号、一九九九年。

- ⑤ 『嘉靖太平県志』卷八、雜志

歲庚寅（至正十年）、十一月、賊（方国珍）紅千艘泊松門港借糧、居民罔敢不予。

- ⑥ 『元史』卷四二、順帝五。

- ⑦ 周伯琦「供祀記」（『金声玉振集』所収）。

至正十三年歲在癸巳夏五月、……矧寇燹之余、旧舶多壞、是歲改用江網、增易舳艫、樵宜北漕、人或難之、雲飄一張、如期曠集。豈非天相一統、無外之大、基万世無疆之休邪。

- ⑧ 方国珍に関する記述は特別の断りがない限り、『元史』順帝本紀、『明史』本伝、『光緒黃巖県志』卷三六、雜志、変異などによる。また『元代農民戦争史料彙編』（中華書局、一九八五年）も適宜参照した。

- ⑨ 張士誠に関する記述は特別の断りがない限り、『元史』順帝本紀と『明史』本伝などによる。方国珍と同様、注⑧の『元代農民戦争史料彙編』も参照した。

- ⑩ 『庚申外史』至正十九年の条。

- ⑪ 事実、これを機に方国珍が海運を始めたことは、『明史』本伝に「元既失江・淮、資国珍舟以通海運、重以官爵羈縻之、而無以難也」とあることから分かる。

- ⑫ 前掲註④寺地論文。

- ⑬ 『宋文憲公全集』卷十九、故資善大夫広西等処行中書省左丞方国珍神道碑。

公（方国珍）亦有慶元・台・溫三郡之地、同県章子善者好從横之術、走説公曰、元数將極、不待知者而後知。今豪傑並起、有分裂之勢。足下奮機一呼、千百之舟、数十万之衆、可立而待。沂江而上、則南北中絶、擅餽運之粟、舟師四出、則青・徐・遼海・広・甌・越、可伝檄而定、審能

行此、人心有所属而伯業可成也。公曰、君言誠是。然智謀之士、不為禍始、不為禍先。朝廷雖無道、猶可以延歲月。豪傑雖並起、智均力敵。然且莫適為主、保境安民、以俟真人之出、斯吾志也。願君勿復言。子善謝去。

- ⑭ とはいえ、張士誠政權に出發の当初から内在する「郷曲保全」的な性格が、領土拡張に一定の制限を加えていたことは愛宕松男氏の研究に詳しい。『朱呉国と張呉国―初期明王朝の性格に関する一考察―』『愛宕松男東洋史学論集』第四卷（三一書房、一九八八年）、初出は一九五三年。

- ⑮ 『明太祖実録』方国珍伝（洪武七年三月壬辰の条）、『明史』方国珍伝、『台州外書』卷一七、遺聞一など。

- ⑯ 『明史』卷一二三、方国珍附伝・劉仁本伝。

- ⑰ 『三台詩録』卷八、劉仁本、蘭亭補詩。

- ⑱ 註④寺地論文ではそのように解釈する。ただし至正十五年の無血占領の際にも、慈溪県令陳麟のように抵抗して捕らえられた者もいたし（『九靈山房集』卷二十三、元中順大夫秘書監丞陳君墓誌銘、親元派の官僚でも慶元路録事陳高のように招聘を断る者がいるなど（『不繫舟漁集』附録、陳子上先生墓誌銘）、その対応はさまざまである。

- ⑲ A・Bに続けて『金声玉振集』には「右二文見劉仁本所著羽庭集。集凡十卷、元時刻者、家有此集。以二文涉海運事、刻附卷末、俟有所考焉」とある。ただし『四庫全書』所収の『羽庭集』は六巻本で、この二文は収載されていない。

- ⑳ 『羽庭集』卷五、饒長信寺経歴曹德輔序。

- ㉑ 註㉒と同じ。

- ㉒ 陳高華「元代的航海世家澈浦楊氏―兼説元代其他航海家族―」『海交史研究』一九九五年一期。

- ㉓ 『元史』卷九七、食貨五、海運。

- ㉔ 『元史』卷一四〇、達識帖睦爾伝。

- ㉕ 『羽庭集』卷五、送戸部尚書徹公通理趣漕回京序。なお『四庫全書』所収本では「止三十分取一、以十一万石進。示開端肇始、不迫而足也」とあるが、『乾坤正氣集』本では最後の箇所が「示開端肇始、不迫於足也」と書かれている。ここでは後者に従う。

- ②⑥ 『元史』食貨志五、海運の条では、「兵部尚書徹徹不花」「戸部侍郎韓祺」とあるが、『羽庭集』では後に見るように、「戸部尚書徹徹不花」「戸部侍郎韓祺」とある。いずれが正しいのかにわかに断定しがたいため、ひとまず前者に従っておく。
- ②⑦ 福建については至正十九年以来、戸部尚書の貢師泰、同じく戸部尚書の李士瞻らが海運を担当した。彼らの文集『玩齋集』『經濟文集』（ともに『四庫全書』所収）中に記載があるが、江浙の海運ほどに詳しい状況は分らない。
- ②⑧ 『明史』卷一二四、陳友定伝。
- ②⑨ 註①高論文参照。
- ③⑩ 方国珍降服後の海上勢力については、奥崎裕司「方国珍の乱と倭寇」「山根幸夫教授退休記念明代史論叢」汲古書院、一九九〇年、藤田明良「『蘭秀山の乱』と東アジアの海域世界——十四世紀の舟山群島と高麗・日本——」『歴史学研究』六九八号、一九九七年、などを参照。
- ③⑪ 檀上 寛「明初の高麗と朝貢——明朝専制支配の理解に寄せて——」『明清時代史の基本問題』汲古書院、一九九七年。
- ③⑫ 『明太祖実録』洪武七年三月壬辰。